（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　植田彩芳子

いわゆる日本画の分野で明治期を代表する画家のひとり横山大観を、洋画では黒田清輝を取り上げて、それぞれの重要な作品複数についての考察を試み、両者に関係の深い岡倉天心の絵画観を参照する。時代の主流に対して正面から向き合った正統的な研究であることが第一に評価できる。同時代のさまざまな思潮がいかに絵画の表現に結びついているかに本論文の関心はあり、たとえば、黒田清輝の描いた「智・感・情」（東京国立博物館）の主題が、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサーの「美的情操論」に由来するのではないかという新しい指摘をしている（第９章）。当時の日本でスペンサーの美学がどのように受容されていたかを詳しく調査し、「智・感・情」の概念がそれを踏まえることを明らかにしたのは、疑いなく本論文の功績である。

このほか、大観の「屈原」（厳島神社）が描かれたころに出版された屈原に関する書物を調査し、達観した忠君愛国の人というイメージとは異なる情熱と多感の人という屈原像への転換点に本図が位置することを指摘し、本図の表現の新しさとそれが当時のジャーナリズムにはじゅうぶんに理解されなかったことを論じる第３章も、従来の議論を一歩進めるものといえよう。また、岡倉天心が東京美術学校で課した課題制作について、宋代の徽宗画院や日本美術協会の先例との関係を細かく調べ、この絵画教育の意義を広い視野で考察する姿勢（第２章）や、明治年間における池大雅・與謝蕪村の作品の紹介と評価について詳細な調査を行ない、それと大観の画風の変化を関連づけようとする発想（第５章）も評価に値する。

総じて、同時代の言説を徹底的に調査する手法が貫かれており、特に新聞や雑誌について多大な時間と労力をかけて資料収集をした様子が、細かな註にも現われている。絵画制作における「心持ち」についての黒田と橋本雅邦の立場の違いを論じるのに、「美術問答」（『美術評論』19 号、1899 年４月）の記事に新たに注目したのは、そのような博捜の成果といえよう（第７章）。

全体に、文献の博捜ぶりに比して造形そのものの分析には不満が残るところがある。黒田の「昔語り」（完成作は焼失）の群像構成の中に意味的な対立を読み取ろうとし、右側の男と舞妓が小督の悲恋の物語を暗示すると考える着眼はよいが、そこから有効な議論へと展開しきれないのは、その一例である（第８章）。用語の定義や先行研究に配慮を欠いて、議論が強引に進められる箇所も散見される。思潮が絵画とどう関係するか、造形に即してさらに考察を深める余地があるだろう。しかし、本論文が明治絵画史の研究として一定の水準に達していることは認められる。審査委員会は、今後の課題が多いことを確認した上で、博士（文学）の学位を授与するのを適当と判断した。